

Xジェンダー当事者の家族形成

武内今日子

東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程

kyoko5520@gmail.com



報告内容

- はじめに
- トランスジェンダーの家族形成をめぐる議論の整理
- 調査の概要
- 分析結果A：親との関係性
- 分析結果B：パートナーとの関係性
- まとめ

*研究を進めるにあたり、平成31年度～令和3年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（特別研究員奨励費・課題番号19J21506）、平成28年度～令和2年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（一般・基盤研究（B））「性的指向と性自認の人口学—日本における研究基盤の構築（研究代表者：釜野さおり）」（課題番号16H03709）による助成を受けた

はじめに

- 人口学において、出生時に割り当てられたものとして二元的に性別を把握し、性別によって集計をおこなうことが自明視されやすい（釜野 2011: 30）
- しかし、**流動的でありうる主体を「数える」ことは、特定のグループを作りあげて正統化する政治的な決断**となる（Browne 2010; 釜野 2011）
- 「Xジェンダー」といった非二元的概念の名乗りは、恋愛的／性的な惹かれとの関係で揺らいでいく側面があるほか（Dale 2013; 山田 2019; 武内 2021a）、「性同一性障害」「トランスジェンダー」概念に付随する規範を避ける試みとして、あるいは暫定的な自己定位や、政治的な主張の一環としてなされることもある（武内 2022）
- 先行研究の整理と事例の紹介を通じ、**家族形成において非二元的な性を表現しようとする**どのような実践が存在しているか、日本の現状を探ることで、調査における性別二元論的な前提を捉えなおす契機としたい

トランス・カミングアウト論からみる、 親との関係形成

●親との関係性の変化

- ✓性別違和を抱える人にとって、親の理解は「性同一性障害」であるかどうかの判断の拠り所にもなっている（杉浦 2013）
- ✓Xジェンダー当事者において、「Xジェンダーであること」それ自体を説明することは避けられ、自分とパートナーの身体的性別が同じであるときに「**同性愛者**」であることだけを説明する傾向があるという（Dale 2013: 322-62）
- ✓それでも近年では、“性の多様性”をめぐる言説を受容した親が、Xジェンダー自認をもつ人を含むトランスジェンダーである子を**理解しがたい存在ではなく、価値ある存在として解釈**している（石井 2018）

トランスのパートナー関係の形成

- トランスのパートナーをもつシスジェンダーの人の語りから、この関係性に異性愛主義やトランスフォビアを克服する可能性があると期待（鈴木 2009）
 - トランスジェンダーが性別移行する際、パートナーがその変化に適応することが困難になったり、トランスジェンダーが出生時の性別を知られうることへのストレスを感じたりすること（Califia 1997=2005; Platt and Bolland 2017）
 - Xジェンダー当事者における、**婚姻をめぐる両義的な態度**（Dale 2013, Ch. 6）
 - ✓ 婚姻を社会的特権と捉えて不平等を主張する人がいる一方、Xジェンダーであっても親族の期待から婚姻する人や、ヘテロセクシュアルな婚姻制度に依拠しなければ、他に幸福な生活を想像できないとする当事者の存在
- しかし婚姻制度・結婚規範の利用による、性別役割分業規範の強化等の課題も（三部 2017）

トランスのパートナー関係をめぐる制度的課題

- 戸籍上の性別変更を可能にする **性同一性障害特例法**（2003-）の要件と問題点
 - ✓ 年齢要件（18歳以上であること）
 - ✓ **非婚**要件（現に婚姻していないこと）：婚姻関係にあり性別変更を望むトランス・カップルに離婚を迫ることになりうる
 - ✓ **子なし**要件（現に未成年の子がいないこと）：実態とは無関係に子どもへの悪影響を想定
 - ✓ **生殖不能**要件、**外性器近似**要件：実際には性器による性別識別は社会生活上重要でないことが多いうえ、身体の摘出を暴力的に求める点で問題
- ➡ 要件を満たしていたとしても、そもそも戸籍上の性別には男女のいずれかしかないため、Xジェンダー当事者は法律上の性別では承認され得ない

調査の概要

- Xジェンダー当事者が、いかにして性別二元論を前提とする制度を生きざるを得ない現実に対処しつつ、非二元的な家族形成を試みているのかを探る
 - ✓ 親との関係性（A-1、A-2）、パートナーとの関係性への着目（B-1、B-2、B-3）
 - ※A-1、A-2については、詳細は武内（2021b）を参照のこと
- そのために、2016年4月～2022年5月に実施したインタビュー調査に基づいて事例を分析した
 - ✓ 初めにXジェンダー当事者団体で知り合った5人から協力者を紹介してもらい、半構造化インタビューを実施。その後、スノーボール・サンプリングに基づき対象者を拡大。
 - ✓ 27名に1～6回実施したインタビュー・データのうち、非二元的なジェンダー・アイデンティティをもち、家族について詳しく語っていた7名の語りを事例として取りあげる。

結果A-1 親との関係における 「性同一性障害」に基づく性別違和の解釈

- 「性の多様性」をめぐる認知は拡大しており（石井 2018）、とくに母親は自ら情報を得て子の性別違和を理解しようとしていた
- しかし**その理解は性同一性障害概念のもとでなされ**、親が手術による身体加工を否定的にとらえ、身体加工がおこなわれないよう子に働きかけやすい

B：母が、カミングアウトしたとき、泣いたくらい悩んだのね、やっぱり。どうしたらいいんだろうって。まさか現実になるとは思わなかった。お願いだから、メスは入れないでくれよって。（20代MTX、2018年）

結果A-2 親との関係における 非二元的なジェンダー・アイデンティティ理解の困難

- 他方で、男女に当てはまらない性自認は理解されにくく、「Xジェンダー」は「**精神病**」や**性別役割からの逃避**として理解されることもある（30代FTXのCさん、40代MTXのDさん）
- それでも「娘」でなく「**子ども**」と言及するような**配慮**が親に求められていたしかしそれは、親子間のやり取りという**私的な場面でのみ達成**され、母親とその友人間で一貫して子の性自認に配慮することには困難が生じていた（Aさん）

A：母親に、「自分のこと娘って代名詞で呼ぶな」って言ったんですよ。それけっこうヒートアップしてて、それ以外、「だから子どもって呼べばいいじゃん」って言ったんですよ、かたくなに。そしたら、母親が自分の話をその、まあお母さん同士というか、大人同士で自分の娘、息子の話をすると思うんですけど。そのときに、自分の話をできなくなっちゃったんですよ。自分の子どもだって言うことがすごく不自然で、「え何、お子さん息子さん？娘さん？」て言われたときに、もう終わりで目の前が真っ暗になるというか、そうなるのが怖いしほんとに話せなくなっちゃったんですよ。（20代FTX、2016年）

結果B-1 同性／異性を自明視できない パートナー関係におけるジェンダー規範

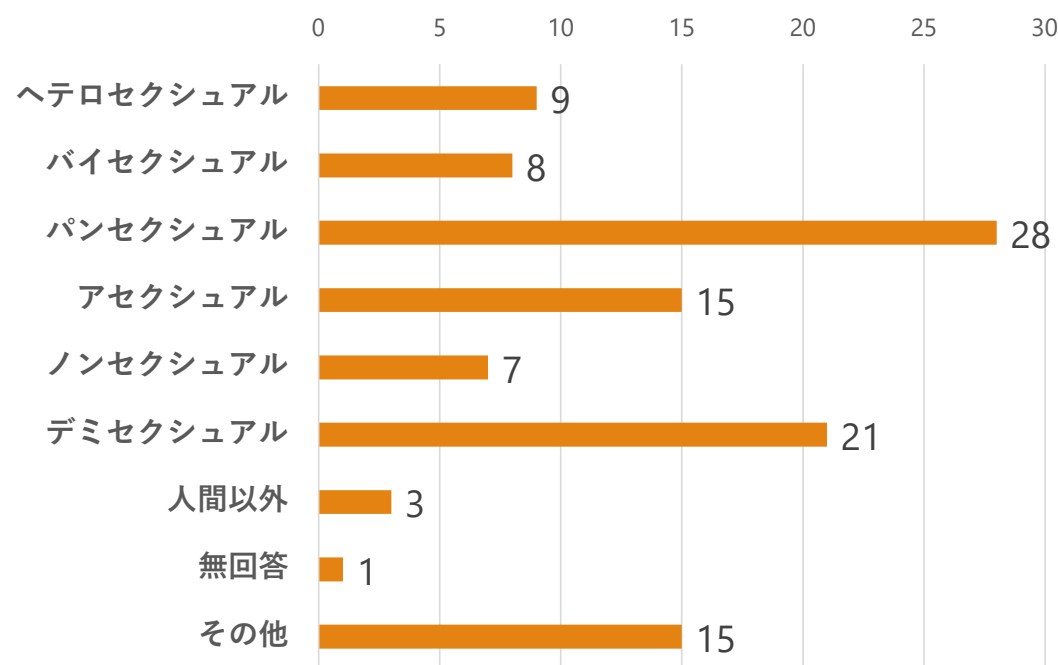
- 戸籍上の性別の関係では「異性」であっても、Xジェンダー当事者において「同性」「異性」関係が何を意味するのかは自明ではない

✓右図：label X 2021年イベント“ALL ABOUT THEY”向けXジェンダー当事者の意識調査結果

- 他方で、**出生時性別に付随するジェンダー規範**

✓FtX（Female to X）で異性愛シスジェンダー男性をパートナーとする人が相手の異性愛指向を尊重しようとして性自認やジェンダー表現の呈示を躊躇い（Aさん）、MtX（Male to X）とFtXのパートナーにおいて、MtXに「男性として稼ぐ」ことが求められやすかった（Dさん、40代MtX、2020年）

現在のあなたの性的指向はどれに分類されますか？（N=107）



結果B-2 「異性愛者」としてみなされつつ、 非二元的な性を生きる

- 職場で「X」であることをオープンにしてダイバーシティ推進の活動に関わっているFTXのEさん
 - ✓ゲイコミュニティに属しバイセクシュアルを自認する男性パートナーと暮らし、結婚を検討している
 - ✓Eさんの望む**同性愛的な関係性**であり、子宮摘出を経て子は産めないとはいえ**男性パートナーの親を安心**させ、男性パートナーにとっては「権利を声高に主張」せず「**隠れ**」ることを可能にしている

E：私との間にパートナーシップはあるものの、なんていうのかな、それだけが人生の必須要素ではないっていうのは分かっている人なので。やっぱり、こう、セクマイ同士大変だよねっていう話とかはしたり。……彼の親御さんは、女っ気が一切なかった息子が連れてきた“彼女”、バツイチで子どももできないけど、でも“彼女”連れて来ただけで、なんかすごい喜んでくれて。もうそれで、なんか、お互い、いろいろクリアできてるというか。ま、彼は彼で、その、親御さんにちゃんと、自分は“ノーマル”、“ノーマル”ってまあ、ちゃんと“女性”の恋人がいるよっていうところを見せれるし、私は私で、パートナーシップを続けたいって言うってくれる人が現れたので。（40代FtX、2021年）

結果B-3 婚姻などの既存の制度を利用しつつも、「Xジェンダー」を可視化し居場所をつくる

- 30代後半のMtXであるFさんは、FtXのパートナーとの戸籍上の性別関係が「男女」であることで「もし何かあって死んだときにとくに、パートナーに何事もなく引き継いでもらう」ことができる**便利さから婚姻**している
 - ✓しかしホルモン療法と性別適合手術を経て外見としては「女性」として認識されるため、改名もしているとはいえ、保険証の性別表記などをめぐり不便が生じうる
- 他方でFさんは、当事者団体のオフ会において、Xジェンダーの人が安心して暮らすための**コレクティブハウスの試み**を話題にする
 - ✓20代のMtXでアセクシュアルのGさんも、「隣の部屋」くらいの関係性でつながりたいとする
- 加えてFさんは、Q市パートナーシップ宣誓証明制度において、**無記載や「その他」としてではなくXジェンダーの存在を可視化**するために、以下の文言を組み込むよう尽力した

「同性カップルの方々に限らず、事実婚、トランスジェンダー、Xジェンダー、ジェンダークィア、アセクシュアルの方々なども宣誓できます。なお、セクシュアリティなどについては、新たな用語や定義が生まれる可能性があり、記載されていない方々を排除するものではありません。」（Q市パートナーシップ宣誓証明ガイドブックより）

まとめ

- 近年では男女の二値に当てはまらない性自認について親に説明している当事者もいるが、“軽度”な性別違和として他者から受容されることがあるほか、二値的なジェンダーと結びつかない語彙の使用は当事者から求められつつも、私的な関係間でしか浸透していない状況がある
- Xジェンダー当事者にとって、恋愛において出生時の性別が自明視され、異性愛を前提としたジェンダー表現やふるまいが求められやすいという困難が感じられている
- 日本においてXジェンダーは法的には承認されていないが、表向きには婚姻制度や異性愛規範を利用すること、コレクティブハウスの生活の構想、パートナーシップ宣誓制度の文言にXジェンダーを入れることなど、非二元的な関係性を生きようとする実践が積み重ねられている
- 戸籍上の性別、ジェンダー・アイデンティティ、生活している性別が一致している・二元的であるとは限らないことを認識し、パートナー関係における「同性」「異性」概念が何を意味するか問い直す必要性

参考文献①

Biblarz, J. T. and Savci, E., 2010, "Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Families," *Journal of Marriage and Family*, 72: 480-97.

Browne, K., 2010, "Queer Quantification or Queer(y)ing Quantification: Creating Lesbian, Gay, Bisexual or Heterosexual Citizens through Governmental Social Research," Kath Browne and Catherine J. Nash (eds.) *Queer Methods and Methodologies: Intersecting Queer Theories and Social Science Research*, Ashgate, 231-49.

Califia, P., 1997, *Sex Changes: Transgender Politics*, San Francisco, Cleis Press. (石倉由・吉池祥子ほか訳, 2005, 『セックス・チェンジズ——トランスジェンダーの政治学』作品社) .

Dale, S. P. F., 2013, "Mapping 'X': The Micropolitics of Gender and Identity in a Japanese Context," PhD thesis, Sophia University Department of Global Studies.

釜野さおり, 2011, 「人口学とクィア・スタディーズ」『人口学研究』47: 25-35.

三部倫子, 2017, 「セクシュアル・マイノリティにとっての子育て」松木洋人・永田夏来編『入門 家族社会学』新泉社, 181-198.

参考文献②

杉浦郁子, 2013, 「『性同一性障害』概念は親子関係にどんな経験をもたらすか——性別違和感をめぐる経験の多様化と概念の変容に注目して」『家族社会学研究』25(2): 148-60.

鈴木宏海, 2009, 「『トランスジェンダーとのパートナーシップ』という可能性」『論叢クィア』2: 137-145.

武内今日子, 2021a, 「恋愛的／性的惹かれをめぐる語りにくさの多層性——「男」「女」を自認しない人々の語りを中心に」『現代思想』49(10): 39-49.

———, 2021b, 「『Xジェンダーであること』の自己呈示——親とパートナーへのカミングアウトをめぐる語りから」『ジェンダー研究』(24): 95-112.

———, 2022, 「未規定な性のカテゴリーによる自己定位——Xジェンダーをめぐる語りから」『社会学評論』72(4): 504-520.

山田苑幹, 2019, 「Xジェンダーを生きる」『質的心理学研究』18 (1): 144-160.